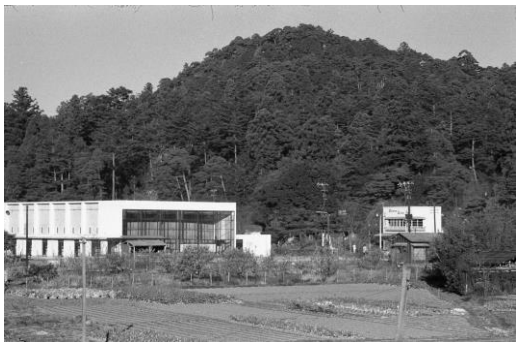
飯能市立博物館
Hanno Municipal Museum

三島由紀夫と飯能・天覧山
～「『美しい星』創作ノート」から～

引間 隆文

今年は、天覧山が大正 11(1922)年に埼玉県初の名勝として指定されてから 100 周年に当たります。当館では、このことを記念して特別展「天覧山」を 10 月 16 日から開催します。

三島が訪れた昭和 36(1961)年に
撮影された天覧山頂からの眺望



「四角いモダンな」「純白の建物」
として『美しい星』に登場する
飯能市公会堂(左)と天覧山
昭和 32(1957)年撮影

飯能のシンボル的な存在である天覧山。風光明媚な景勝地として古くから人々を魅了してきました。特に明治以降、鉄道開通により東京からのアクセスが良くなると、日帰りの行楽地として多くの人々が訪れるようになりました。その中には、文士たちもいました。彼らは、飯能・天覧山を舞台として実に多くの作品を描いていますが、中でも最も有名な作品の一つが、三島由紀夫の『美しい星』でしょう。

『美しい星』は、昭和 37(1962)年に出版されました。三島文学としては異色なＳＦテイストの作品で、後に映画化もされています。

作中、天覧山は「羅漢山」として登場しますが、その描写の正確さに感心させられます。また、描かれている飯能の風景もとてもリアルですので、三島が実際に飯能を訪れていることが分かります。

『美しい星』の創作時に作られた「創作ノート」が、山梨県山中湖村にある三島由紀夫文学館に所蔵されています。それによれば、三島の飯能取材は、昭和 36(1961)年 11 月 13 日のことでした。ノートには、三島が描いた市街地の略図、飯能駅内の様子やバス停、民家等のスケッチが記されているほか、「野球最中」「柚子羊羹」などのお菓子の名前、銀座通りの店舗の種類、郵便ポストの集配時刻まで書き留められており、実際に飯能を取材して歩き回っていた様子が伝わってきます。

同日の夜には天覧山に登り、山頂で日の出を見ています。天覧山の日の出については「笑ふ唇の如き日の出。赤き中に光る赤。」、「6 時 15 分つひに日の出。西南の富士の頂上に日当たる。高空の雲、すでに白し。富士の頂、投げられた矢をハッシと受けるやうに、頂上の雪の鏡で日を受けとめバラ色に染めたり。日光さんらんたり。直視不能」と記しています。

ノートを読むと、三島が飯能を細かく取材していたこと、作品には取材時の印象や浮かんだ言葉がかなり反映されていることが分かります。また、旅の疲れも癒えぬ取材の翌日には『美しい星』の執筆に取り掛かっていることから、何らかの強いインスピレーションを飯能・天覧山から得たものと推測されます。

「『美しい星』創作ノート」は、特別展「天覧山」で展示されます。飯能では初公開となる貴重な資料です。ぜひ、ご覧ください。

【参考文献】

三島 由紀夫『決定版 三島由紀夫全集』第 10 巻 新潮社 平成 13(2001)年